

韓国歴史文化紀行（一）

中村 修 也*

My Korea Tour : An Account of History and Culture

Nakamura Syuya

はじめに

私はこの夏（平成十一年）、八月・九月と二ヶ月にわたって韓国に研修に出た。これはその二ヶ月間に私が体験した韓国文化の紀行文の一部である。文章は日記の形式をとった。その方が、臨場感が伝わりと考えたからである。

なにしろ韓国というとキムチと焼肉ぐらいしか思いつかない人間である。無知に等しい。それでいて大学時代には日韓古代関係史などもかじったことがある。また韓国人の知り合いも何人かはいる。だから、本当ならばもっと韓国について詳しくてもいいはずである。ところが実際の韓国体験というと、今年の正月に学生と三泊四日で卒業旅行に出掛けた経験しかない。なんともおそまつな状態である。近年では、キムチなどは日本のスーパーでも手軽に買うことがで

きる。焼肉なんかは、はるか前から日本の外食の重要なポジションを占めている。世の中は知らないうちに韓国文化をどんどん取り入れているにもかかわらず、私の韓国に関する知識は二十年前から進歩していない。これははずかしいことである。

幸いというか偶然というか、最近では食文化について研究を始めている。鄭大聲氏の『食文化の中の日本と朝鮮』（講談社現代新書、一九九二年）や『朝鮮半島の食と酒』（中公新書、一九九八年）を読むと、日本化した食べ物の中には随分と韓国ルーツのものがある。鮭・漬物・豆腐等がそうだという。厨房道具の中にも韓国ルーツのものがあるという。これは、日本の食文化を知るためには、ひとつ韓国の食文化を調べる必要がある。強引ではあるが、そのような意義付けをして韓国に行くことにした。しかし、なにか具体的な目標がなければ、やみくもに行ってもしょうがない。キムチや焼肉は有名で、いろんな本も出ていることだろう。それではつまらない。

うーん、では何を調査しようか。そこで考えたのがお菓子とお茶である。主食についてはおそらく韓国国内でも研究があり、ハンゲルが読めれば大体のことはわかるだろう。しかし意外に副食ですらないお菓子については研究が少ないのではないかと。事実、日本でみた韓国食文化関係の文献には、お餅のことは多少出てきて、お菓子についてはほとんど論じられていない。人があまりやっていないこ

* なかむら しゅうや 文教大学教育学部

との方がやりがいもあるだろう。そんな考えからお菓子とお茶について聞き取り調査をすることにした。そして各地を歩き、韓国歴史に触れることで、食文化が形成された要因を肌で感じてみようとした。それが成功したかどうかは、はなはだ不安であるが、楽しかったことだけは事実である。

付け加えておくと、私は韓国の公用語であるハングルは一言半句たりとも解しえない。ではどのようにして聞き取り調査するのか。なあに、それは韓国の友人が何とかしてくれるだろう。まずは出掛けることだ。なんとも傍迷惑な調査であるが、ご容赦を請う。

八月一日(日) 晴

朝七時起床。今日は韓国へ出発の日。二度寝して遅れるわけにはいかない。朝食はおにぎりと大学芋。七時半に家を出て亀有駅に向かう。七時四五分の電車に乗り北千住に。北千住で常磐線に乗り換えて日暮里へ。日暮里につくと、私が乗る予定のスカイライナー七号が満席であるアナウンスが流れる。やはり昨日のうちに切符を取っておいてよかった。

八時一五分発のスカイライナーで成田第二ターミナル駅へ。

成田ではすぐにJASの搭乗手続きを済ませて、マクドナルドでアイステイーを飲んでから、C87ゲートへ向かう。Cゲートはモノレールに乗る。搭乗はビジネスクラスから行われる。ついでエコノ

ミー。私の席は10C。通路側である。エコノミーの前から二列目で比較的よい。もちろん禁煙席。右隣は大学生くらいの女性。しかしどうも学生ではなさそう。一人旅だし、すぐに寝入ってしまう度胸のよさは、旅なれている雰囲気。

水平飛行に入るとすぐに軽いブランチが出た。クロワッサンサンドがメインで、ジャガイモの千切りサラダマヨネーズ和え・ローストビーフ一切れ、チキンの香蒸し二切れ・ブチトマト一個。それにプリンと黄桃一切れ・さくらんぼ一つが付いていた。オレレンジジュースとコーヒーをもらう。高信太郎の『まんがハングル入門』を読むが二〇頁ほど疲れる。イヤホンで音楽を聴きながら眠りに入る。

一時四〇分ジャストに金浦空港キムポに到着。ひじょうにパンクチュアルである。ソウルは雨。迷うことのない一本道を税関の方に進む。女性の管理官である。ここもあっさりと通過。預けていた荷物もすぐに吐き出されてきた。成田空港で早くに預けると、ここでも早く出てくるのだろうか。似たようなバッグの中でポケモンシールが目立つ。ドラえもんの名札に書いた「中村修也」の字もあざやかだ。赤ちゃんを抱えた女性がキャリングカートを引き出せないでいるので出してあげる。なかなかの美人。しかしお礼の言葉はない。

所持品申請書を係りの男性に渡す。「申請するものはないですか?」と英語で二度聞かれる。「特にありません」と日本語で二度答える。「割れ物注意」の札が気になったのだろうか。だが入国書を見て、



韓国教員大学・教授会館

「あーん」と一人で納得して通してくれた。「研究」目的というのをみたのだろうか？そこを通過した後、両替所が正面にあったので、早速四〇万円を両替。四〇八万^{ウォン}になる。一〇^{ウォン}が日本円で約一円のレートである。

金恩淑^{クムソク}さんの約束通り、一番左の出口から出る。しかし金さんの姿はみえない。ロビーをぐるりと一周したが、やはり金さんの姿は見当たらない。出口にはツアーの現地添乗員が犇^{ウツ}いている。「とくとくソウル3日間」だとかアサヒトラベル「栗林グループソウルツアー」、フジトラベルサービス「ミヨシ様・タナカ様・榎中下組御一行様」、セコプラザ観光「えひめハッピーツアー」。ほとんどが女性の現地添乗員である。

二時四五分金さん現れる。どうやら同じ待合場所の両端に座っていたようだ。金さんはちょうど二時頃に来ていたという。私がロビーをうろついていた時刻なので、そこですれ違いが起こったようだ。なにはともあれ無事彼女に出会えてよかった。

三階のカフェでバスの出発時間まで談話。日本書紀の成立問題について彼女がいま原稿を書いていることを聞く。韓国や中国には明解な神話はないそうである。つまり中国のような征服王朝では、一系主義的な神話構造は邪魔なのである。

九番乗り場から四時〇分発の清州行きのバスに乗る。李^イさんが今日の一〇時二〇分の飛行機で博多に行ったとの話。金さんに言わせ

ると、李さんが日本に行くときはいつも雨だそうである。雨の影響で少しバスの到着が遅れる。ソウルへの高速道路が雨で水浸しになり一昨日から通行止めとなり、おとといから待っている車と一緒にこのバスはソウルに入ったというのが、バスの運転手の話。ほんとうか？

バスに揺られて約二時間で清州チョンジュバスターミナルに到着。途中、睡魔に襲われながら、金さんの話に耳を傾ける。随分と田舎にやってきた雰囲気。しかしこれはまだ序の口であった。

バスターミナルからタクシーで韓国教員大学へ。ああ、早く到着してくれ。眠くて気が狂いそうだ。大学の教授会館の前に金さんの旦那さんの朱チュ先生が待っていてくれた。私の部屋は教授会館の二〇一号室である。椅子と机、ベッド、本棚、サイドテーブル、ロッカー等が完備されている。しかし風呂はなくシャワーがトイレと一緒にある。とりあえず荷物の整理がてら二〇分後に迎えに来るまで休息したらよいとの言葉にあまえる。だが二〇分は短い。

金さんが朴宰用君と国分麻里さんの二人の大学院生を連れて迎えに来る。表には朱先生が車で待っていてくださった。五人で近くの大きな食堂へ。何が食べたいですかと尋ねられたが、私の知っている料理は焼肉とサンゲタン、ピビンバ、クッパ、プルコギくらいなものなので、おまかせするしかない。「おいしいものなら、なんでも」と謙虚に答えておく。

大きな食堂だがお客は少ない。いつもは満員のことだ。後で知ったことだが、朱先生はけっこうなグルメで、この辺の食堂は食べ歩いており、美味しい食堂を知り尽くしているとのことであった。彼の実家はソウルの東大門市場トドンシヤンヤンの近くにあり、兄の一人は大学路テヒノで寿司屋を経営している。味についてうるさいのは筋金入りだ。

歓迎は焼肉料理となる。最初に並ぶ小皿が多い。まずはビールで乾杯。この辺は日本と同じだと思っただが、実は韓国式では、まず食事してから酒宴となるのが基本的スタイルである。だからビールで乾杯して、食事をしながらお酒類を飲むというのは、日本式が韓国でも浸透した結果なのである。

この時、私以外はいっせいに顔を横に向けて飲んだ。私も思い出してすぐに顔をそむける。これは年長者に対する礼儀である。この場合の年長者は朱先生であろう。と同時に私も年長者であり、客人であるから、大学院生二人の敬意は私と朱先生の二人に払われたものと考えてよい。韓国は儒教の国といわれる。李氏朝鮮王朝が儒教を国教としたためである。儒教は両班ヤンバンという貴族階級を生み出した。文官と武官の両方の貴族という意味で両班と呼ぶ。両班は民衆に対して支配的であると同時に、手本となる存在でもあった。つまり士大夫として礼儀作法の権化とならねばならなかった。彼らの礼儀作法は儒教を基礎にしている。そのため上下関係は厳しい。食事作法についていえば、一家の長老と後継ぎがまず食事をする。女性陣

は別室で後から女性だけで食事をとる。男性同士でも、長幼の順は厳しい。年長者に面と向かって食事するような無作法なことはしない。年長者の正面を避けて飲食を行う。朴君と国分さんが顔を横に向けたのはそのためである。

一番目に食べたのは緑色の薄い餅のようなもの。蕪をすりおろしてそこに小麦粉をまぶして胡麻油で味を調べて揚げたものだという。次に食べたのは瓜の漬物。漬物といっても甘い。黄色く外皮が剥かれているため、やわらかい。三番目がどんぐりで作ったゼリー。色はねずみ色で、一見、蒟蒻のようにみえる。案外、口ざわりがよくて、私はおもしろい味だと思ったが、他の人は金さんが食べただけで、手を出さなかった。そしてキムチ。これはなじみの味だ。水キムチはまずその汁を飲んでみる。甘いレモン酢のような味だ。

さて焼肉だが、この店では、肉そのものには味がついていない。純粋な肉の味である。しかし、これがよく焼くと味わいが出てくる。タレは胡麻油が出された。二度ほどつけてみたが、あまり好みではない。むしろタレなしの方がよい。胡麻油の味が強く出すぎている。しかし朱先生はこのタレを好んで付けて食べていた。甘味噌をサンチヨにくるんで食べるのは一般的だが、ここでは胡麻の葉っぱにくるんで食べる。これは国分さんが嫌がっていたように、けっこう葉の味が独特で、とても焼肉では太刀打ちできないと感じた。

一人一人の突き出しのようなものである。これは小皿にキャベツ

ときめさやとトウガラシを入れて何かの汁につけた物。なんという名前かは聞かなかった。ワカメの酢漬けのような物もある。牛の血を固めた物のスープも出た。中には冬瓜が入っている。基本的には冬瓜スープに牛の血の塊を入れている。最後に素麺を食べる。素麺は日本のように冷たいものではなく、にゅうめんのように温かいもの。具はナムルである。トウガラシ味噌を入れてもよい。このあたりで、ビールを止めて、ミネラルウォーターにする。ここ清州はミネラルウォーターの世界的原産地である。朱先生が「世界三大水の産地」と教えてくれたが、どこまでが本気で、どこまでが冗談かわからず、にわかには信じがたかったが、ガイドブック『自由自在韓国』(JTB)にも「椒井薬水 スクチヨン・ヤクス 世界的な湧出量を誇るミネラル・ウォーターの産地で朝鮮王朝時代すでに利用されていたという。水質は硫酸塩、硅酸を含む炭酸水で皮膚病と胃腸病に効く。別名チヨジョン薬水」(p281)と書かれていた。

このミネラル・ウォーターは炭酸水である。けっこうきつい炭酸を含んでいる。この旅行の後半で、実はこの炭酸水の風呂に入ることになるのだが、それは後述を楽しみにしてもらおう。

八月二日(月)晴

七時半起床。朝食は一階の教授食堂で定食一八〇〇Wを食べる。味噌汁?と粟入りご飯、三品セットのキムチ・ほうれん草のナムル・

白身魚の煮付け。この食堂は基本的には教授のためにあるが、学生が食べても問題はない。後にわかるが、附属高校の生徒も食べに来る。朝は基本的にペッパンと呼ぶ基本定食である。ご飯と汁、それに三品セットである。三品セットは日替りであるが、キムチ・ナムル・煮物が基本である。たまに特別定食が出ることもある。これは二五〇〇Wである。その他、実は洋食セットもある。しかし洋食セットの存在を知ったのは随分後である。洋食セットは、トーストと目玉焼き・ハム・牛乳・サラダが基本形である。

食後に自動販売機のコーヒー、二〇〇W。コーヒーを飲みながら、朝から国分さんと歴史教育について堅い話を論じる。彼女は大学院の修士課程で社会科学教育法を研究している。ことに韓日関係について研究している。修士論文のテーマは「小学校教育による対日感情の形成」についてである。

私の考えは、日本は神話を持っている分、アイデンティティーが得やすく得たというもの。逆に、韓国の人は明確な神話を持たないため、アイデンティティーの確保に、経済力や軍事力に頼らざるを得なくなる。神話を学ぶ事がどのように子ども達の精神に影響を与えるかは数字的に証明しろといわれても、それはできない相談である。そのような問いを投げかける人とこのような話をする事自体が困難である。しかし、神話にしる昔話にしる、子どもたちがそれを聞くことによって、自分たちが生きている時代というのが、お

話の時代よりずっと後の時代なんだなあ、という時間感覚をまず持つことができる。それだけでもアイデンティティーの確保に役立つと考える。

一〇時過ぎに朴君の車で清州市内に向かう。朴君は大学院の一年生で、日本語を習って約六ヶ月目である。日本語がべらべらというわけではない。私の話もゆっくりと喋ってなんとか辞書をひきながら理解できるという程度である。だが、彼が日本人と純粹に一对一で会話したことがないということを考えれば、よくできる方である。大学は大田にある忠南大学である。古代史を専攻しており、金恩淑さんを慕って韓国教員大学の修士に入学したという。将来的には古代韓日関係史を研究し、日本にも留学したいと考えているらしい。

清州市内を抜けて上党山城サムサンゴクに向かう。

上党山には金庚信が築いた門と石垣があると掲示板に書かれている。朝鮮三国時代の建造物ということになる。壬申倭乱イムシムワウルの際にも利用されたとのことだ。

入口には「南門」と書かれた扁額が掲げられている。門の上上がってみる、南側が百済で北側が新羅とのこと。門から両側に石垣が伸びており、その上を歩くことができる。我々は西に沿って歩き始めた。急勾配を登ると、清州の町が一望できる角に到達した。

石垣に腰を降ろしてしばし休憩。朴君は忠清南道の出身とのこと。



明岩薬水

彼の恋人の話などを聞かせてもらう。彼に言わせると、まだ彼女ではなく、友達だということである。昨日、「釣った魚には餌をやらな」という韓国の格言？を聞いたので、彼女と結婚相手は同じ人かという質問を試みる。すると、「デートはいろんな女性とするものでしょう」という返事が返ってきたので、安心？した。韓国の儒教は男性に便利ないように作られているようだ。

いつもなら歩くことは極力避けるのだが、なぜかこの日はへんな気をおこして、山城を一周してみようということになった。ところがこれが大きな間違いであった。歩けど歩けど道は永遠に続く。一時間ほど歩いたところで、向こうから歩いてくる集団に出会った。朴君が南門からどれくらい歩いてきたか尋ねたところ、きれいな女性が三〇分くらいだと答える。^{アイコ}「号！である。朴君は彼女に「我々は一時間歩いたよ」と伝えると、彼女たちの口からも「号！」という溜息がもれた。

東門がみえたところで、村に着いた。どうやら観光地の村らしい。食べ物屋ばかり建っている。また料理屋の前には池があり、それなりの景勝地を形成している。我々はそのどが渴いたのと、お腹がすいたのと、とにかくどれかの食堂に入ることにする。おばさんが持ってきた水をおもわずぐいっと口に含んだところ、水以外の味がする。朴君の顔もいくぶんゆがんでいる。「しまったー！」と思っただけで、それを認めるのがまた怖い。何か味が付いているねと私が言つと、

朴君が「匂いがします」と言う。「キムチのような味が薄く付いているのは、腐らないようにだろうか」と再び尋ねると、「ミネラル・ウォーターでしょう」という返事。お互い納得はしていないが、飲んでしまったものはしょうがない。

朴君はメニューを見ながら高いですねといって、遠慮したのか「ピピンパでいいですか」と言っただけを注文した。五〇〇〇Wである。ご飯の上にナムルのり、その上に半熟の目玉焼きのついで。それをスプーンでよくかき混ぜて食べる。おいしいねと言って食べると、朴君が「本当においしいですか？」と聞き返す。返答に困って「最高ではないが、まずくはない」と答えると、「もっと安く美味しい店があります」と言う。「じゃあ、今度はそこに連れて行ってください」と言う。しかし本当にまずくはない。彼の質問は、日本人に韓国料理がどのように感じられるかという不安感と値段と対比しておいしいかどうかの問題なのである。

食後、歩いて駐車場に戻る。その後、近くのミネラル・ウォーターの湧出地を訪ねる。この時から雨が強く降りだす。みやげ物店の前の広場に水呑み場があり。それがミネラル・ウォーターだと朴君が言う。もっと別に湧出地があるような気がするがとにかく従う。このミネラル・ウォーターは『自由自在』にも「明岩薬水ミョニアム・ヤクス 清州市から最も近いミネラル・ウォーター湧出地がここ。場所は市中心部から約5km北東に行った上党山城のある辺り

で、この天然水は皮膚病と胃腸病に効くといわれている。近くには薬水ホテルなどの宿泊施設がある。」(P281)と書かれており、有名な場所である。

清州市内で買い物をすることにして、一番大きなショッピングセンターであるMAGNETという所に行く。最初に、本屋に入り、食べ物の本と朴君がぜひ買えという地図帳を購入する。四〇五〇〇W。朴君との会話がうまく行かず、ゆっくりとは買うべき物を選べなかつたがいろいろ知ることができた。

まず重要なのは、韓国にはお茶やウーロン茶のペットボトルは売られていないということだ。逆に日本ではこれらが売られていることから、日本人の飲料水についての嗜好性が如実になった。つまり日本人ほどお茶が好きな人種はいないということである。次に朴君が茶葉が売られているコーナーに案内してくれた。そのコーナーを見ると、韓国人はお茶よりコーヒーの方を好んでいることがわかる。

また、並べられたお茶の宣伝文句には「便秘によく効く」ということが書かれている。朴君がお茶を説明するときも「このお茶は便秘にいいです」と何度も繰り返し返した。お茶は美味しい飲料としてよりは、健康によい飲み物として意識されているようである。お茶が健康食品として最初に登場するのは、鎌倉時代の栄西が著した『喫茶養生記』以来、伝統的な現れ方なのである。はたまた高麗人参茶などの影響であろうか。多くはティーバッグになっているが、中



802夕食

には瓶詰めのものもあった。これらは伝統茶である。

朴君が写真を撮ってもいいですよ、と言ってくれたので、写真を撮っていると、売り子さんたちがやってきた。なにやら朴君が、私のことを日本人のお茶の研究者だと説明しているようであった。その中の一人がモデルになつてくれるといたずらっぽく言うので、お言葉に甘えて写真を撮らせてもらった。別の穀物売場の宣伝マンも写真を撮ってもよいかと朴君が聞くと、「やる気が出てくるからぜひ」にと非常に喜んで撮らせてくれた。

六時に教授会館で夕食をとる。カレーとカルピタンが選べるというので、もちろんカルピタンにする。カルピタンというのはカルビが入ったスープである。それ以外にはキムチ・ナムル・唐辛子味噌がつく。食べ終わる頃に朴君が姿を現す。国分さんと三人でデザートのスイカを持って私の部屋に行き、今後の予定を話し合う。そしてとりあえず、明日は水安堡スアンポの温泉に行くことを決める。しかし今台風が朝鮮半島を目指しており、ちよっと危険かもしれないな、と思いつつ就寝につく。

八月三日（火） 台風。

七時半起床。今日は学生食堂で食べてみる。ご飯・冬瓜スープ・キムチ・煮肉・もやしナムルで一〇〇〇W。一〇〇〇Wということ、たったの一〇〇円ですよ。なんとという安さか。涙が出るほど嬉

しくなる安さだ。ここ韓国教員大学は国家がかりの大学で、IMF以前は学生は学費・寄宿料・食費ともに全額タダであった。今は一、二年生のみタダである。それにしても嘘のような話である。とにかく教員になる学生に、経済的負担をかけないことを原則としている。寄宿舎に入ると、三食ともに寄宿舎の食堂で出される。ただし、味はあまりよくないらしく、寄宿生で食事が出るにもかかわらず、学食や教授食堂に食べに来る学生もいる。

今日、天気予報では台風が朝鮮半島に上陸することのこと。温泉行きは危ぶまれるか？九時、国分さん・朴君の三人で水安堡の温泉に出掛ける。運転は朴君。彼は二十七歳の独身男性。水安堡までは快適なドライブ。信号もほとんどないし、雨足もそれほどきつくない。

二時間ほどでスアンポに到着。大衆浴場に入る。入浴料は一人三〇〇W。

この時は、初めての温泉入浴だったので、要領がわからず、「大衆浴場」にしたが、実は、韓国では温泉はホテルに併設されるのが一般的である。多くの場合、ホテルの一階などに裏手の方に「サウナ」として存在している。ホテル以外で独立している温泉は、地元の人相手の施設であることが多い。したがって、私が最初に入った所も、安い地元民相手の施設であった。朴君がしきりに「施設がよくないです」を繰り返していた。

まず、一階のフロントで入浴料を支払う。そして入場券を持って

地下に向かう。ここにも受付があり、そこで入場券を渡すと、タオルとロッカーのキーを渡される。後はほとんど日本の銭湯と同じである。脱衣場で裸になり、浴室へ向かう。浴室内には温泉の浴槽が二つ、サウナが一室、その横に冷泉の浴槽が一つあった。平日なのでお客は少ない。小学生くらいの男の子が三、四人いて、例の垢すりタオルというか垢すり手袋で自分の体をこすっているのが微笑ましい。シャワーが三機ならんでいる。シャワーを出しっぱなしにしていたりして、けっこう鷹揚である。冷泉の方にはお年寄りが多い。温泉の温度は四〇度と四二度くらいの浴槽である。サウナはスチームのような音はしているが、スチームは出ておらず、かといって温度が高すぎるわけではないので、じっくり入っていることができる。朴君は熱いのが苦手なようで、三分ほどで退室する。私はサウナに入ってから、冷泉に入り、再びサウナに。この時は一〇分ほど入っていた。汗が面白いように出てきて、指で手足をこすると垢も出てくる。その時、ふと気づいたが、韓国人はサウナには手ぬぐいを持ち込んでいない。たまたまなのか、それが習慣というかルールなのか。これは確かめておかなければいけないかもしれない。

四〇分ほどしてから出る。自動販売機でセイロントイーを飲む、五〇〇W。外はどしゃぶりにかわっていた。ロビーにいた客に朴君がこの辺では、どこが美味しい店かを訪ねる。鶏肉料理の店がいいという話でそこに向かう。ところが我々の食べたのは鶏肉料理では

なかった。普通の韓定食である。どういつ判断をしたのか、朴君と国分さんが値段を考えて鶏肉料理を止めたのかも知れない。三人分で一四〇〇Wであった。この頃はまだ金銭感覚がなかったので、彼らに任せていたが、今から思えば安い定食を食べることに意味はなかった。今回は韓国の食文化を調査に来ているのだから、できるだけその土地の名物を食べる必要があるのだ。ところが、この段階では韓国料理の相場がわからなかったものだから、彼らに「お金には気にしないで美味しい物、面白い料理を注文して」と言う勇氣がなかった。だが、何も心配する必要がないことが、次第にわかってきた。とにかく韓国の食事は、日本では信じられないくらいに安いのだ。三人前だろうが四人前だろうがたいしたことはない。もっとも、逆に韓国の金銭感覚が身につくと、一万W（千円）がとても高い物に感じるようになるのだが……。

帰り道は雨になった。運転を長い時間にわたって朴君一人にさせているので、せめて甘いものでも食べてゆつくりしようと、ケーキの美味しい喫茶店に行きましようかと誘う。するとそんな喫茶店はないという。コーヒーショップはコーヒーを飲むところであって、ケーキなど置いてなく、飲み物しかないという。

ここで最初のカルチャーショックに見舞われる。喫茶店に飲み物しかないなんていうことは日本ではあまりない。うまいずいの差はあっても、ケーキの一つくらいは大抵の店ではおいてある。何度

も「本当？」と尋ね返すが、日本人である国分さんも「ない」と言う。いささか信じられぬ思いであったが、ないものはないようだ。しかたがないので、ケーキ屋さんとケーキを買って喫茶店でコーヒーを飲みながらケーキを食べることにする。

ケーキ屋というのも実は正確ではない。パン屋さんである。鳥致院チヨチオン 駅前のパン屋で横長のチョコレートケーキを買う、六〇〇〇W。ケーキが六〇〇〇Wというのは、他の食べ物に比べると高い。そして気づいたのが、このパン屋にはデコレーションケーキしか置いていなかった。つまり日本のようにカッピングケーキが置いていないのだ。もちろん直径に違いがあり大きさは三段階くらいあったが、丸ごとケーキを買う人がいるのだろうか。横長のロールケーキが比較的買やすいといえよう。

ところがこのデコレーションケーキ販売は、この店に限ったことではなかった。韓国では、ケーキというところの丸ごとのデコレーションしか売っていない。この謎については追々話すことになるので、ここでは詳しくは触れない。ただしソウルにはカッピングケーキもある。だがソウルは外国人観光客も多いし、一番の都会だから別格である。だが、そのソウルでも一般的には、丸ごとケーキである。もう一つ、観光地のホテルにもカッピングケーキが置いてあることもあった。それくらいである。

ケーキを持って大学近くのカフェ「トンナムナム」という店に入

る。朴君と国分さんはコーヒーを、私はセイロンティーを頼む。それぞれ三〇〇W。ところが出てきたセイロンティーを見てびっくり。さきほど水安堡の大衆浴場で飲んだ自動販売機の缶のセイロンティーがそのまま出てきたのだ。私はちゃんとしたポットに入った紅茶を想像してただけに、再びカルチャーショック。中身が同じでも、三〇〇Wもとるのだから、せめて缶から出して、アイスティーのように装って出したらどうかと思うのだが、これも国民性の違いだろうか。

買ってきたチョコレートケーキは甘すぎて、お世辞にもおいしいとはいえない代物であった。甘いだけでスポンジもばさばさであった。チョコレートクリームもバターたつぷりで、お腹に重い。朴君は甘いケーキは好きではないと最初から言っていた。それを無理矢理食べさせたのだが、これほどおいしくなければ好きにならないのも当然と思える。実はここに、韓国人が「お菓子」をそれほど好きではない理由の一端が隠されていたのだが、それも追々書くことにしよう。後日、金さん夫婦にこの店のことを話したら、あそこは烏致院で一番まずい店だとにもなく言われてしまった。

五時半に大学総長に会うことになっていたので、シャワーを浴びて、服を着替え、ネクタイを締めて、金さんと一緒に総長室に挨拶にでかける。「はじめまして。お会いできて光栄です（チョウム、ペッケスムニダ。マンナソ、パンガプスムニダ）」というハンゲルだけ

会話集でみて覚える。とにかく総長に会ったら、忘れないうちに、まっさきにそれを言おうと歩きながら反復する。ところが、総長の部屋に行く途中、金さんが「マンナソではなく、マンナペソ」と訂正してくる。更に他の話をし掛けてくるので、「忘れるから今は話し掛けないで」ときっぱり言う。こちらは必死なのだ。金さんは笑っている。

夕食は朱先生がご馳走してくれるというので、金さんと国分・朴の四人でまず金・朱邸に向かう。この日は一九五九年以来の台風で、北部の各地でひどい水害が発生した。テレビの画面では平屋建ての家はほとんどが水没し、マンションも一階・二階は水没・浸水の様子を映し出していた。幸いここ中部は、風は強いが、水害はほとんどなく安全であった。しかしそれでも停電になり、朱先生がご馳走するために連れて行ってくれた料理店でも、停電のままで、キャンセルを立てて食事した。

料理を列記すると、椎茸の炒めたもの、トラジ、白菜キムチ、焼き魚、蟹の塩辛、水キムチ、ドングリゼリー、茄子炒め、ほうれん草キムチ、明太子キムチ、小海老の唐辛子味噌和え、牡蠣の塩辛、豆もやしの胡麻油和え等一五品に鍋がつく。鍋は海鮮鍋で、もちろん味付けは唐辛子味噌である。真つ赤な大鍋にいろいろな海鮮の具と野菜が煮込まれている。一つの大鍋を皆で食べる。ここで一番おいしかったのは明太子の塩辛である。それと牡蠣の塩辛。しかし孟

夏でもあり、幾分不安を感じながら、おいしくいただいた。

ご存知のように、韓国の食事は匙と箸の二つで食べる。箸は小皿の料理を摘む時に使い、匙はご飯を食べたり、鍋物を食べる時に使われる。だからお鍋には参加者全員が、自分の匙を突っ込んで、具をとったり、スープをすくったりする。汚い、という感覚はない。

鍋とは本来そういうものである。一つ鍋の物をつつき合ってこそ、一味同心が成立する。あまり他人の箸や匙を気にするようでは、仲間意識は育たない。そもそも仲間意識がない者同士と一緒に食事をする必要はないのである。そして逆に仲間同士であるからこそ、最低のルールは守り、他の仲間が汚いと感じるような無作法なことはすべきでないのだ。このバランスが重要である。

たとえば親子兄弟などの家族ならば、同じ鍋を箸でつつき合っても、あまり不潔感はない。ところがまったく知らない者同士がいきなり宴会で同じことはできない。しかし家族ではないが、気心の知れた者同士ならば、直箸もそれほど気にならない、ということである。韓国ではこの仲間意識が食事においては維持されているといえよう。もちろん日本にもなくはない。しかし基本的には、宴会などでの直箸は無作法とされている。ここに食事の孤立化が発生している。

柳田國男は小鍋の発生を食事の孤立化の始まりと見ているが、同じ現象と捉える事ができる。むしろ直箸を嫌うことは、家族以外の

食事における、共同体の仲間意識の崩壊、社会生活における外面的ルールの発生を意味しよう。武家作法などは、基本的に契約関係における主従・同輩との関係を円滑にするために発生した。つまりある種の派閥に属しながら、地縁的共同体ほどの信頼関係が築きにくい社会集団におけるルールである。それは多くの人間と友好関係を結ぶためには便利なルールではあるが、本質的な信頼関係が構築されるものではない。ルールに頼らない所に生まれる信頼こそが、本当の信頼であろう。

韓国の人はこの信頼関係をいささか安易に構築してしまう傾向がある。そのため、日本人の私は時々対応に困ることにこれから遭遇することになる。

八月四日(水) 晴

今日も朝食は学食とする。食後はコーヒーを買ってベンチで雑談。他にも同じようにコーヒーを飲みながら歓談しているグループが、そこここにみられる。よほどの貧乏でない限り、学生のほとんどが食後にコーヒーを飲む。学生会館のコーヒーは一杯一五〇Wである。日本円で一五円。安すぎる。これを飲めない学生がいるとしたら学費が払えないのではないかと疑わざるを得ない。もっとも量は少ない。紙コップに半分くらいである。柚子茶ユズチャだと一〇〇W、一〇円だ。

それ以外に学生たちがよく飲むのは冷水だ。校舎の各階に浄水器

が置かれていて冷水と熱湯が出る。たいていの学生は小型ペットボトルを持ってきており、これに浄水器の冷水を入れて飲んでいる。このことも実は韓国の食文化を語る上で非常に重要なポイントなのだ。

それにしても韓国のミネラルウォーターはおいしい。一日のうちでけっこうな量を飲んでしまう。もちろん今が暑い夏であることも影響しているであろうが、まずい水ならいくら暑くてもそんなには飲めない。やはりおいしいからこそ飲んでしまうのだ。

自動販売機についても簡単に触れておこう。日本の自動販売機は、基本的には一〇〇円でたいていの缶が価格統一されている。ところが韓国では四〇〇W・五〇〇W・六〇〇W・七〇〇Wの値段の缶が同じ機械に並存している。もちろん一番よく飲まれるのは四〇〇Wの缶コーヒーである。後は五〇〇Wのセイロンティーとナツメジュース、シッケジュースなどである。

韓国には缶のお茶はない。いや考えてみれば緑茶やほうじ茶、烏龍茶、その他さまざまなブレンド茶の缶が売られている国は日本だけであろう。韓国でも烏龍茶だけは日本人が焼肉を食べた時に欲しがるので、ソウルでは売られている。しかし地方の自動販売機で烏龍茶が売られているのを見たことはない。それほど日本人にはお茶が必需品である。と同時に韓国におけるお茶の地位は「コーヒー」や「ジュース」より低いことがわかる。

お茶にかわる水がただでおいしく飲めるなら、お金を出してお茶を買う必要はない。それなら味のついた「コーヒー」や「ジュース」を買うのが自然であろう。だがそれだけではない。韓国の人も水をお金を出して買うことはする。エヴィアンなどのミネラルウォーターのペットボトルはどの店でも売っており、よく買われているからだ。もちろん単価は安い。ニリットルで八〇〇Wなんてのもある。お茶を買わない国民が水ならば買うということの意味は大きい。日本でも水が普通に売られており、若者の中にはオアシス族なんていうのも登場した。しかし水とお茶を比較すると、おそらくお茶の方が多く買われているであろう。「桃の天然水」や「サブリ」等の商品が売られているのは、まだ純粋な水にお金を出すことに抵抗がある証拠である。つまり味の無い液体にお金を出すことは非常な抵抗があるのである。

韓国で水が普通に買われているにもかかわらず、お茶が売られていないことは興味深い現象である。つまりお茶が韓国では嗜好飲料水として認識されていない。あるいは承認されていないということの意味する。アジアの中で、中国・日本の両国がお茶を嗜好しているのに、なぜ韓国だけが「お茶に馴染んでいないのだろうか。これは大きな問題であり、疑問である。これもまた今後の課題だ。

今日は朴君の車で清州見学に出掛ける日だ。まず最初に国立清州博物館を見学することになっている。清州の町で朴君の日本語の先



盧さん（左）と朴君（右）

生をしていたという女性を拾って国立清州博物館に向かう。彼女は盧珠英^{ノスヨ}さん。二五歳の美人である。朴君は彼女が同乗しただけでも楽しそうだ。私ももちろん楽しい。

博物館の入場料は四〇〇W。これもまた安い。国立博物館があるということは清州はたんなる地方都市ではないということだ。清州に対する認識を新たにした。韓国は古代には鉄生産の国であったが、清州もまた古くは鉄生産の地域であつたらしい。博物館の入口を入つてすぐ左手に、溶鉄の鞆が展示されており、製鉄用具の出土品が並んでいる。そして統一新羅末期の鉄製の仏像が微笑んでいる。この仏像は比喩ではなく本当に微笑んでいるのだ。最初見たときは、目が細すぎ、鼻も細すぎで美人ではないと感じたが、少し距離をおいて見ると、なんとも楽しそうに微笑んでいることかと感心させられた。

昼食は冷^{ナムル}麺を食べる、四〇〇W。緑豆を練りこんだ黒っぽい麺を店員が缺で切ってくれる。いつも思うのだが、客の前で切るくらいなら最初から切ってくればいいのに、どうしてそうしないのだろう。不思議だ。一般的に知られているのは水^{ナムル}冷麺である。スープが実は重要な味を引き出している。麺はおかわりができる。韓国で驚くのは、基本的に食べ放題であることだ。定食のキムチを初めとして、小皿に出されている物は、いくらでもおかわりができる。デザートにはスイカが出た。

食後に清州の韓国文化村に行く。ここはいわゆる民俗村とほぼ同じで、両班や豪農・小農の家屋が復元移築されている。すぐ傍にダム湖がある。このダムに水没した家屋を高台の公園に移築して文化村が成り立っているであろう。農家にしても敷地面積は広い。ところが屋敷そのものは、両班の屋敷でもそれほど大きくはない。もちろん部屋数はたくさんある。ところが一つ一つの部屋が狭い。だから立派な屋敷だが空間的な広大さは感じられない。

たとえば家人一人一人に部屋が与えられているのだが、その部屋の広さは三畳くらいである。三畳くらいの広さの部屋が三つ四つ横に並んでいる。展示施設だから部屋には何も置かれていない。だが、実際には家財道具を置いているはずである。そうすると部屋の主が手足を伸ばせる空間は、三畳よりずっと狭くなる。後にも何箇所かの民俗村で両班の屋敷を見ることになるが、共通していることは次の諸点だと思う。

一つは入口の門脇に奴婢の部屋と家畜小屋があるということ。家畜は主として乗用の馬と農耕用の牛であろう。奴婢が門番をも兼ねているのであるが、家畜小屋と並んで部屋が設けられているのは、両者が同等の扱いを受けていたことを想像させる。

次に男性と女性の空間が区別されていることである。これも儒教の教えから来ることであろう。しかし一方で、女性の空間が確保されていることを意味する。つまり日本の封建時代のように、男尊女

卑の倫理が同じ空間で実践されるよりは、ずっと自由であったことを意味する。韓国の場合、男女はあくまで同一空間においては男性を上にもちあげなければいけないが、きちんと女性の空間があるから、そこでは男性に気を使う必要がない。これは女性独自の空間を持たなかった日本と比べると、はるかに自由である。

三つ目は、主人の書齋の面積が狭いということである。一番広いのは客間である。これは変な見方かもしれないが、その家で一番大事にされるのがお客なのではないかと思う。家人は質素でも、お客には充分な振る舞いをする。これも儒教である。

それと韓国建築の一番の特徴は、なんといってもオンドルである。冬の厳しい寒さを凌ぐために、韓国では古くから床暖房施設が一般家庭に普及した。そのために複雑な建築構造はとりにくい。まっすぐな長方形の長屋を、いくつかの個室に区切る。その床下を温風が通り、建物全体を暖めるといふ構造である。だから長方形の一端に薪の焚き口があり、その反対側に煙や温風の出口の煙突が設けられている。薪の燃やし方がまずいと一酸化炭素中毒をおこす。かつてはそのような事故もあつたらしい。

茶室研究者の中村利則氏は、両班の書齋にある小さな出入口を見て、茶室のにじり口の原形とし、利休が考案した小間の原形は韓国にあると論じている。たしかに安東河回村には茶室そっくりな両班の茶室がある。しかし韓国の寒さを考えると、にじり口のような

小さな入口は、温度を逃がさないためではないかと思いたくなる。なぜなら書齋よりも、薪の焚き口に隣接する部屋には必ず、その小口があるからである。これも今後の課題である。

景色のよい場所に、涼み台というか東屋が設けられており、そこで盧さんと朴君にインタビュを試みた。主として盧さんから話を聞いた。それは彼女の方が日本語が堪能であるのと、朴君にはいつでも聞けるからである。

まず、お菓子のことだが、主として食べるお菓子はスナック類であるが、あまりお菓子は食べないという。それはお菓子を食べる習慣がないためと、美容のためである。ただし彼女の友達の中には、お菓子がたいへん好きで、一度にスナック菓子を五袋も食べる人がいるという。これは例外。伝統的な菓子については、節句や行事のある時に食べるという。普段はどうかと聞くと、店で売っていないことが多いという。昔は家で母親が作ってくれた餅菓子も、今ではあまり家庭でつくられなくなったようだ。

緑茶については、基本的には飲むのはコーヒーで、緑茶はあまり飲まないという。盧さんは二年間日本に留学していた経験があるので、緑茶に親しむ機会があった。抹茶も経験としては飲んでいる。日本にいる時は、緑茶にも親しんだけれど、韓国に戻ってからは、飲まないという。一つには韓国の緑茶が日本のそれに比べておいしくないからだという。また、緑茶よりコーヒーの方がおいしいと思うか

らでもある。

ケーキについても盧さんはあまり韓国では食べた経験がないようだ。ケーキを食べるといっなのは誕生日というイメージが強いという。つまりあの丸ごとケーキだ。だいたいケーキそのものがあまり一般的に売られていないらしい。そこで身近な甘い物としてプリンについて聞いてみた。するとプリンの存在は大人になるまで知らなかったという。日本の子どもは、ほとんどまちがいにプリンが好きである。しかるに韓国の子どもはプリンを知らない。これは驚きに近しいものがあつた。今の韓国を見ると、日本とそれほど変わらない経済的發展を感じるのだが、実態としてはまだまだ韓国は貧しいのであろうか。

食後の飲料物については、やはり「水」という答えが返ってきた。水を飲むのが当然すぎるほど当然という感じの返事であつた。ご飯を食べた後に飲むのが「水」というのは、どうしてもさびし過ぎる感じがする。やはりお茶であつてほしい。だが待てよ。西洋では食事の合間に飲むのはアルコール以外では、やはり水ではないか。フランス料理にワインはつきものだが、それ以外にテーブルの上に出てくるのは水である。けつしてお茶ではない。とするとお茶を飲む国民は中国と日本くらいなのであろうか。お茶を飲むほうが特殊なのであろうか。疑問、疑問、疑問。

ビデオでのインタビュは、彼女が日本語を話せたために非常に

うまくいった。これは今後も使えると思った。夕食は、教授会館で三人で食べる。

八月五日（木） 晴

朝起きると左目の腫れがひどくなっている。金さんに相談にして朴君と国分さんに付き添ってもらい、清州市内の病院に行くことになる。どうやら汗が目に入ったのではないかと思う。とにかく風呂に入れないし、シャワーも日曜・月曜はお湯が出ない状態だから、いささか不潔になっているのかもしれない。

市内の総合病院の眼科でみてもらう。若い男性の医師が担当してくれた。ほとんど待つこともなく、診察を受けることができたのは幸運であった。診察結果は、ハングルができないので分らないが、抗生物質を出してくれたことからして、結膜炎系の病気であろうと思う。治療費は三八〇〇W。外国人は無条件に三万Wかかるのだそうだ。四日分の目薬と飲み薬をもらう。しばらくコンタクトレンズは装着できない。

昼食は大学近くの中華料理店に行き、ジャジャン麺を食べる。甘い黒い味噌が主体で、刻んだ野菜が入っているどろりとしたソースを麺とかきまぜて食べる。このソースがジャジャンと呼ばれるものである。Xオージャンと椎茸の味がするがその正体は不明。味は全体的に甘い。付け合せに大根の沢庵（黄色で輪切り）とキムチと生

玉葱・黒味噌が出た。国分さんはこの生玉葱に黒味噌をつけて食べるのが好きだと言う。朴君の話では、この麺とキムチは合わないとのこと。黒味噌は塩辛く、日本の東北地方にある味噌に煮ている。私としては、まずいとは思わないが、それほどおいしいとも思えなかった。というのは、麺が油っこいのだ。だから食べている間に油っぽさが飽食感を抱かせ、もういい、という感じがしてくるのだ。

実はこのジャジャン麺は、韓国人にとつての国民食に近い存在である。つまり韓国人のほとんど全員がジャジャン麺を好んでいるということだ。少なくとも私が出会った韓国人で、ジャジャン麺を嫌いと言う人は一人もいなかった。実はこのジャジャン麺こそが、韓国人の食嗜好の謎を解く重要な鍵の一つであることが後にわかってくる。

夕食は、モウテファさんを国分さんが誘って三人でおこげ料理を食べに行く。モウさんの車で出かけた。モウさんは三三、四歳の独身女性で、やはり高校の現役教師で大学院に所属している。普段は一週間に一度、大学の講義にでるが、今は夏休み中なので集中講義を受講しにきているとのことであった。家庭科が専門とのこと。

日本の大学も大学院に関しては、社会人枠をもっと自由にして、現職のまま、何年かかっても単位を取得すればよいという制度を設けて、学生数の減少に対応してはどうかと考える。生涯学習を唱えるならば、単に個別の資格を与えるような制度に縮こまらないで、

大学院を広く公開すればよいと思う。

さて、石焼ごはんであるが、副食に関しては韓定食と基本的には同じである。まず石焼き釜からご飯をすくい出す。ご飯を入れる器が別にあるのだ。そして釜に残ったおこげにトウングルレ茶を入れる。おこげのお茶漬けのような物をつくるのだ。トウングルレ茶は冷たいのだが、石焼釜が相当に熱いので、そそいだけで沸騰するくらいになる。

おかず類は小皿に載っている。これを大ざるにのったださまざまな野菜というか野草でくるんで味噌をつけて食べる。包む野菜はチシャ、白菜、胡麻の葉などである。考えてみれば、野菜を野菜で包んで食べるわけだ。韓国人がいかに野菜を多く摂取するかがこれからもわかる。だがなんといいても、おこげのお茶漬けが美味しい。この香ばしい味は米食人ならではの感慨を味わえる味である。

韓国料理は知らぬ間にお腹がいっぱいになる。少しずついろいろな物を食べているので、そんなに食べたつもりがなくても、実はけっこうな量を食べているのだ。

食後、コーヒーでも飲もうかという話になったが、その喫茶店がなかなかない。トンナムナムに行こうと言ったが、二人ともあそこは教員大学生が多いから嫌だと言う。ミホの交差点のパン屋さんにテーブルがあったのでそこに入ることにする。

コーヒーではなくパッピンスを注文する。パッピンスとは日本の

カキ氷のようなものだ。カキ氷に小豆餡のほか乾燥果実のかけら、餅・栗・寒天などの具がたくさんトッピングされている。韓国人はこれをグチャグチャにかき混ぜて食べるそうだが、私は日本風にそのまま食べた。これはキムチが入っているわけでもなく、韓国の食品のわりには、他国人でも抵抗なく、食べられるものである。

モウさんの車が大型車なので、つい車の話になった。韓国は二〇年前からは想像できないくらいに車社会になっている。かつては車は贅品で、籤に当たらなければ購入順がまわってこないといわれた時代もあった。それが今は車であふれている。

女性なら軽自動車の方が扱いやすいかと尋ねてみた。すると、彼女ももとは軽自動車に乗っていたのだが、一度事故を起こしてから、兄が大きい車にしなさいと、買い換えてくれたのだ、という。つまり大型車でなければ、事故の際に危険だということ。そしてそれほど事故は頻繁であるということだ。

そういえば韓国では軽自動車はほとんどみかけない。大学内にも軽自動車はない。たまに見かけることがなきにしもあらずだが、はっきり言って珍しい。私も運転に自信のある方だが、韓国で国際免許を使ってまで運転しようとは思わない。それほど韓国人の運転は荒っぽくて、危険だ。これも急激な資本主義発展のひずみが生んだ現象の一つであろう。少なくとも韓国人の運転を見る限りでは、儒教の精神はなくなつたと言わざるを得ない。

八月六日(金) 晴

七時半起床。学生食堂で朝食をとる。太刀魚の炒めたものがついていた。食後にユルムチャを飲む。いわゆるハト麦茶であるが、関西で言うはったい粉を溶いたようなもので、粉っぽくておいしくない。韓国人もほとんど飲まないらしい。ではなぜ自動販売機にあるのか？謎である。

一〇時一五分頃、朴君が来る。清州で盧さんとその友達の呉さんウを拾って公州旅行に出発である。呉さんは盧さんの高校時代の友達である。背が少し高く一七〇cmくらいか。髪は長い。日本語は高校時代選択したが今は忘れて使えないそうである。

まず公州クジュへ向かい、武寧王陵ムニョンワンリョウを見学。今、工事中とのこと無料であった。たしかに王陵は石室を整備中で中を見ることができなかった。外側からその墳形をみるのみである。その上方に宋山里1・2・3・4号墳がある。解説板によると四七五〜五三八年の百済王家の墓だそうである。下に降りると資料館があり、武寧王陵の内部が復元された実物大の模型が展示されている。やはり夏休みの学習で、子どもたちが両親に連れられてきていた。

公州は忠清南道の中央に位置する。かつての百済王朝の首都であった。文周王元年ムンジュワン(四七五)に漢山城ハンサンシヨウから遷都してきた。その後、聖王セン一六年(五三八)に泗サ・サヒ(今の扶余)に移るまでの五代、六三年間、都として栄えた。武寧王は在位五〇一年〜五二三年で、百済中

興の名君とされている。もうしわけないが、今は小さな地方都市となってしまうている。ゆっくりと街を見てまわる時間がなかったの、よけいにそう感じたのかもしれない。韓国では、信仰の対象や、記念物に対しては配慮がなされているが、都市そのものへの配慮はあまりないように感じられた。それはもちろん日本も同じなのだが、古都を省みた都市計画というものが、とにかく感じられなかった。

そこから麻谷寺マコサへ向かう。途中、盧さん達が持ってきてくれた韓国のお菓子を食べる。餅菓子でほの甘くおいしい。ただし灼熱の車の中に置いてあったので、温かくなっており、少々痛みがない心配。

昼食はガイドブックに載っている二鶴ニカクという店。食べたのもガイドに推奨されていたクツパである。牛の鎖骨や膝関節を12時間以上もコトコトと煮込んで作ったスープに、牛のアバラ肉やモモ肉が入っている(P263)ということだ。店自体は、日本でいうところの大衆食堂だ。どの程度ほんとうに有名店なのかはわからないが、お客が絶え間なく来ていることはたしかだ。味も悪くない。コクのあるスープがおいしい。ご飯とキムチなどの小皿が五品ほどつく。これで一人前五〇〇Wというのは安い。

麻谷寺で初めて韓国の山岳寺院を経験する。とにかく日本のお寺のように狭苦しいお寺は韓国にはない。どこも広大な敷地に悠然と建てられている。麻谷寺は六四〇年に百済の慈藏律師によって創建

された寺である。南後方には泰華山が聳え、遙か南西の甲寺カアサのある鷄竜山ケリョンサンと対を成して、鷄竜山国立公園を形成している。

川沿いの参道を歩き、洗心橋を渡り、境内地に入る。最初に解脱門を抜ける。仁王像が迎えてくれる。次に天王門では極彩色の四天王が待っている。日本の四天王は筋肉隆々でスピード感を感じさせる神秘性を持っている。ところが韓国の四天王はずんぐりむっくりで、どちらかというとユーモラスを感じさせる。顔もぜんぜん怖くない。アニメのようだ。

本殿の大雄殿は朝鮮王朝中期に再建されている。この建物もまた日本とは趣を異にする。日本の古寺は「黒」のイメージがつきまとう。まず瓦が黒い。木が古さびて黒ずんでいる。仏像もまた錆びて黒ずんでいる。ところが韓国の寺院は明るい。本殿もたいていは塗りなおされている。色は朱色と緑を主体とした極彩色である。本尊も金ぴかである。とにかく柱がすべて朱色で塗られているのはインパクトが強い。もちろん古さびた建物もある。しかしそれを良しとしているのではなく、たんに修理・再建するお金がないから、そのままにしているだけという感じだ。そのへんの美意識が日本人と異なるような気がする。

寺の裏手に行くと、子どもたちが水遊びをしている川原があった。韓国の山の水はきれいだ。清らかで透き通っている。今夏はことに暑さが厳しい。子どもたちは涼を求めてお寺にやってくるようだ。

参道および境内には木陰と水遊びのできる清冽な川がある。何人もの子どもが川に入って遊んでいる。親たちは川岸の木陰でそれを眺めながら涼んでいる。

盧さんが一番に川に入ってゆく。彼女が一番子どもっぽいのだろうか。ついで呉さんが川に入った。私も負けずに入る。朴君は河辺で我々三人を眺めている。水は冷たく気持ちがいい。すっかり下半身がびしょぬれになった子どもが、お母さんに泳いでもいいかと聞いて、ダメと言われていた。その気持ちはよくわかる。いつそのこと泳ぎたい子どもも。全身が濡れると後がたいへんと思う親。両方の気持ちがかかる。

適当に涼んだ後、再び車で鷄竜山に向かう。地図の上ではそれほど距離とも思えなかったのだが、実際にはけっこうな時間がかかった。朴君は疲れたことであろう。私も実は一日に二箇所のお寺巡りを計画したことを、いささか後悔しつつあった。甲寺に着いた時には、その後悔は頂点に達しており、歩くのがつらかった。もし女性二人がいなかったならば、朴君にもう今日は甲寺はやめよう、と言っているところだ。女性二人がしらっとして平気なのに、男の私が弱音をはくわけにもいかない。うーんつらいところだ。

甲寺は四二〇年に創建された寺である。この寺も壬辰倭乱の時に焼失し、一六〇四年に印浩大師によって再建されている。整備され



甲寺

た参道をまたも歩く。「鶏龍山甲寺」と書かれた扁額のある大きな山門をくぐる。両側には竜の首が突き出ている。建物は山の斜面に段段に築かれている。そのためかえって景観がいい。本殿はやはり大雄殿という。韓国と日本のお寺の違いがもう一つ。韓国人の信仰の篤さだ。日本人にも信仰心篤い人はもちろんいる。だが、観光で訪れて、真剣に仏像を拝む人は少ない。形式的に尊敬の態度をとるだけである。ところが韓国人には、本殿に入り拝跪する人が少なくない。これには感心した。

韓国の拝跪の仕方は大仰である。まず仏像に向かって両足を揃えて立つ。そして跪いて両手の掌を上に向けた状態で、額を床につけて拝む。再び立ち上がり、同じことを何度も繰り返す。汗が出るほど繰り返す。何を願っているのかはわからない。朴君の話では、受験生の母が、子どもの合格を祈っていることが多いという。そうとも思えないが、とにかく真剣である。それゆえ、本堂は誰も口をきかず、静かである。拝跪する人の衣擦れの音だけが聞こえてくる。

ここもやはり傍を川が流れている。川には大きな岩がいくつもあり、その岩の上でシートを広げているカップルもいる。後にも詳述するが、韓国の寺はある種、韓国人の憩いの場でもある。山門前には土産物屋が連なるが、山門から寺院までの距離があるから、喧騒は寺院までは達しない。

お寺をゆっくり見てから宿泊地に向かう。今日の宿泊地は儒城温ユンシムン

泉。韓国中部地域では有名な温泉地である。すぐそばに大田^{テシヨン}という都市が控えている。儒城には忠南大学がある。この大学は朴君の出身大学だ。だからこの辺は彼の縄張りのようなもの。

宿は一室三万W。二人分で約三千元という安さ。部屋にはベッドのほかに冷蔵庫・エアコン・テレビ・バス・トイレが完備してある。日本のビジネスホテルとかわらない。しかも日本のように予約しないと泊まれないということはない。たいていの場合、空部屋がある。だから旅行先でのんびりと宿を決めるというのが、韓国人の一般的な旅行の仕方のような。それを認識しない間は、私は朴君と旅行にでも、常に宿の心配ばかりして、彼にあきられた。それにしても二人を三千元ほど泊めてしまつて、経営はなりたつのだろうか。とこちらが心配になる。

お風呂のお湯は温泉とのことだったが、部屋の風呂では温泉の雰囲気はでない。まあ、それでも久しぶりのバスタブなのでうれしい。とにかくシャワーをあびる。だが、シャワーだけでは物足りないのので、バスタブにもお湯をためて、湯につかる。朴君が待っているのは分っているが、どうにも我慢できない。あー、極楽、極楽。

八時前に外出。まず食事だ。「何が食べたいですか？」と聞かれるが、何を食べても、「こちらには初めての料理が多いから、「おいしければ何でも」と答えるしかない。ただ、あたりの看板を見渡すと、牛の絵を描いた物が多いから、牛肉料理が名物ではないかという気

がする。しかし、不思議とこの手の会話が朴君との間では成立しない。ひとつには私が人一倍食べ物に興味があり、朴君が人並み以下の感心しかないということに原因があるのかもしれない。とにかく朴君の案内である店に入る。ここは儒城温泉で最高の料理店とのこと。彼の卒業パーティーもこの二階でしたという。ここで牛の骨付き肉の煮込み料理を食べる。味が甘い。盧さんは甘すぎると言つてあまり食べなかつた。たしかに甘すぎるくらいかもしれない。盧さんと朴君は冷麺を主として食べ、私と呉さんがブルコギを主として食べた。

食後、車を忠南大学の駐車場において近くの飲み屋に行く。ここも朴君行きつけの店で、店内には大学生らしきグループがいくつも見えた。ビールをビツチャーで二杯飲んでフルーツの盛り合わせを頼む。これで二四〇〇W。結構しそうに思えたが、意外に安かつた。四人で二時間いて二四〇〇円というのは破格に安い。店内は薄暗い照明で、各テーブルに大きなキャンドルが灯されている。

ここでは韓国の女性論・男性論に花が咲いた。韓国はいわずとされた儒教の国である。それゆえ女性の貞節についてもやかましい。ところが男性は婚前交渉をしないかというところという。この矛盾は女性を苦しめるのではないか。

私が渡韓前に読んだ呉善花^{オソンファ}の『スカートの風』(角川文庫)の中に書かれていた韓国男性の暴力について事実かどうか聞いてみた。そ

の本には、韓国男性は、結婚前は熱烈な求愛をするが、いったん結婚をしてしまうと、それが妻に対してのしつけであるがごとく、暴力をふるうと書いてあったのだ。盧さんは、そのような話によく聞く話だと言う。また朴君は「釣った魚には餌をやるな」という言葉があつて、それに近い現象だとも、男性の立場から告白した。

なぜ既婚男性が妻に暴力を振るうかについては、もちろん朴君は黙っているし、彼女たちもわからないという。私の一つの解釈は、ようは儒教教育と男尊女卑の延長にある現象ではないかと考える。もちろんすべての既婚男性が妻に暴力を振るうわけではないだろう。しかし、週刊誌ネタになる程度の頻度でそのような事件が起こっていることも事実だ。

男女が結婚する時に、傍から見てみると恥ずかしいくらいな演出をして結婚写真やウエディング写真を撮る。これは結婚後、奥さんがつらい時に、この幸せな写真を見て耐えるためだとも書かれていた。

結婚前、男性が女性を愛していたことは事実であろう。結婚するまでは二人は別の「家」に所属する独立した人間であつた。ある種対等ともいえる。ところが二人が結婚したとたん、二人は同じ「家」の人間になり、一つの家ではそれぞれの地位が決まるという現象が生じる。つまり父・母がいて、夫がいて、妻である女性がいるという序列が生まれるのである。対等な関係から序列のある関係へと、

二人の関係は転換する。このことが儒教秩序の中で自然に行われるのではなからうか。

それとも一つ。家庭内で父親が母親に対する態度を見て子どもは育つ。つまり反復学習による刷り込みである。日本でも親に殴られて育った子どもは、自分が親になつた時、自分の子どもを殴つて育てるといふ。その現象が、恋人同士から夫と妻という関係に変化した時に蘇ってくるのである。それに既婚男性の社会で、「妻に舐められてはいけない」という不文律が言い交わされ、頭の悪い男ほど、一番悪い方法つまり暴力という方法で、夫と妻の関係を維持しようとするのではないかと思う。

三人は私の考えに納得したかどうかはわからないが、黙って聞いていた。

次に結婚前のセックスに話題は移つた。女性には婚前交渉は認められていない。もちろん建前では日本だって同じことだ。だが、今の日本の若者はたいてい性体験を早くに済ませている。そして大人たちもそれを黙認している。では韓国ではどうだろうか。韓国男性の多くはやはり性体験をもつという。

韓国の若者も性については基本的には日本人と同じようだ。だが、女性倫理の厳しいこの国で、男性は誰を相手に性交渉をもつか。プロの女性であろうか。一つにはそうである。まず男性には兵役がある。二十一歳になると軍隊に入る。そこで先輩から売春宿に連れ

て行かれるらしい。

ではすべてがプロの女性かというところではない。いや最初はそうでも後からは、自分たちと同じ若い女性を相手にするのが普通だ。はなはだ矛盾した話だが、女性を儒教倫理で縛っている男性が、若い女性に倫理を逸脱した性行為を求めているわけだ。そして何割かの女性はそれに答えているはずである。結婚前に性行為をもつた女性には基本的には普通の結婚はできない。だが若い男性は性行為を求め。韓国における若い女性の立場はとても苦しいものである。

だが我々の心配をよそに、ここ儒城では高校生の援助交際が行われていると言う。なんと、日本とまったく同じではないか。こういうことだけは伝達が早いのだ。聞くところによると、四〇代の金持ちの男性に、女子高生が声をかけて売春するらしい。儒教の女性倫理も一方的で困ったものだが、援助交際という名の売春はやりきれなさを感じる。

宿に戻ってしばらくしてから盧・呉さんの部屋に行き、再び話をする。私は眠気が襲ってきていたので何を話したかあまり覚えていない。ただひとつ驚いたことがある。それは盧さんの素顔だ。シャワーを浴びて化粧をとった彼女の顔はとても幼い。高校生くらいに見えなくもない。昼間の彼女の顔は大人っぽい美人だ。最初、別人かと思っただけに素顔は子どもっぽい。

その後も、韓国女性の顔を注意して見て分ったことが二つ。それ

は女性の化粧法のポイントが二つあるということだ。まず一つはアイライン。目元が切れ長に斜め上を向くように描かれている。第二ポイントは唇だ。ルージュというカリップの色を派手な赤色系の色にして、くつきりと塗ること。この二つが韓国女性特有の化粧法である。しかも化粧がみんな上手である。はつきりいって日本女性の化粧は素人にしか思えない。韓国女性はそれに比べてプロ並である。みんな完璧な化粧を自分の顔に施している。これは相当な訓練を積んだことだろうと、感心して眺めいつてしまふ。それがいいのかわいのかはわからないが。

八月七日(土) 晴。

朝起きて、昨夜の約束どおり、朴君と二人で温泉に出掛ける。せっかく儒城に来て温泉に入らない手はない。車で出掛ける。ビルの地下三階の駐車場に入れて、地下一階の温泉場に行く。温泉というと木造家屋や露店風呂を想像しがちだが、韓国の温泉はたいていがビルの中にある。少々雰囲気がない。入浴料は五〇〇〇Wだったと思う。

浴室は広い。中央には黄土温泉があり、丸い湯船だ。もちろん大理石風呂。そして右側に水風呂があり、天井から打たせ湯？という水が噴出する管がある。左側には普通の温浴槽がある。サウナは右端に二種類あった。一つはドライサウナで、もう一つはスチーム

サウナである。洗い場があり、壁にはシャワーが並んでいる。左奥には小プールがある。長さ一〇メートルほどのプールである。

なんだか日本の健康ランドのような施設で、温泉という感じではない。広々とした浴室に、まだ朝も早いのに何人かのお客がいる。

観光客なのであろうか。あるいはホテルの泊り客かもしれない。ここがホテルかどうか確信はないが、たぶんホテルだと思う。

スチームサウナが気持ちよかったので、ここにゆっくり入って朴君と話をする。小プールでも二往復した。だいたい韓国人はサウナに入った後で身体を洗う。そして身体をみると、それはもう次には出ることを意味する。一番最後に身体を洗って、さっぱりしてから出るというパターンである。温泉と言いながら、実はリフレッシュルームである。

宿に戻ると女性陣もとくに起きて我々の帰りを待っていた。朝はファーストフードの店で簡単にすませようと提案し、朴君も賛成した。ところが彼は、パン屋でパンと飲み物を買って公園で食べることに勝手に変更してしまった。値段的にはそれほど代わらないから、私としてはゆっくりと座ってホットコーヒーを飲みたかった。この辺がよく理解できない。私の言うことがわかっていないのか、それとも彼が強引なのか。

私はコロッケと称する油で揚げたパンと甘いパンを買った。コロッケは食べられたが、丸くてピンクの餡が入った甘いパンは一口でや

めた。甘いというものではない。韓国人は唐辛子ベースの食事をしている、どうしてこのような甘すぎるパンを食べるのだろうか。人によって好き嫌いはあるだろうが、パン屋で一般的に売っているということは、買う人もけっこういるということだろうが、日本人には甘すぎて食べられない。

扶余フヨもかつての百済の首都。五三八年、熊津（現公州）から遷都された。以後、百済滅亡まで百済文化の中心地として仏教文化が花開いた所である。白馬江（錦江）の西南岸に開けた都市である。現在は小さな街となり、かつての繁栄を忍ばせてくれる景観はない。街のほぼ中央に扶余都庁があり、その正面に百済の勇将階伯將軍ケソクの像が立っている。

まず国立扶余博物館に行く。入場料は四〇〇W。ここには朴君の後輩が勤めており、その人を紹介される。男性かと思っていたところ、あにはからんや妙齢の女性であった。背のすらりとした彼女は図録を三冊も持ってきてくれて、できれば食事に招待したいと申し出てくれた。私は博物館のこともいろいろ聞きたくて楽しみにしていたのだが、なんの手違いか見学を終えて食事しようという時には、彼女は時間がなくて先に食事をすませていた。その場で一緒に食事しようというのを、朴君が見学してからという段取りに勝手にしてしまったのではなからうか。残念なことであった。帰りがけにも彼女は親しみを込めた笑顔で見送ってくれた。

さて、博物館であるが、清州・公州と見てきて三館目であるが、韓国はなんと遺物の豊富な国であるうかと感心した。朴君は展示物を見ては、「同じです」と一括りにいうが、なんのなんの瓦一つ取り上げてもいろいろな模様があって面白い。石碑も随分と残っていておもしろい。韓国の古代史研究がどの程度進んでいるか知らないが、日本より資料は多いような気がする。私はこれまで『三国史記』『三国遺事』しか知らなかったが、それは一部の文字資料であることを痛感した。

この館で興味深かったのは六〜七世紀の扶余陵山里一号墳西壁に描かれた青龍図である。まだ角もなく、よくある髭を生やして火を吐きそうなドラゴンではなく、青蛇に耳と背鰭がついた程度のかわいい青龍である。色彩も青と朱をうまく使って描いている。図録には次のように解説されている。

「陵山里1号墳は花崗岩と、大きな板石を用いて作られた横穴式石室であり、墓室の四壁に四神図、天井には蓮華と飛雲文とが描かれている。壁画の描写技法は宋山里例とは異なり、板石の側面を丹念に磨いたあと、そこに直接に画が描かれている。この蓮華文に近いものが伽 地域の高霊古衙洞壁画古墳で確認されている。」(『博物館物語』国立扶余博物館、1994、P21)

ちなみに宋山里墳の技法はフレスコ技法である。青龍図以外にも白虎図・朱雀図・玄武図があるのなら見てみたい。

もう一つこの売りは、やはり百済時代六〜七世紀の金銅龍鳳蓮菜山香炉であろう。この香炉のレプリカはこの後各所でみかけた。扶余陵山里建物址から出土したこの香炉は椰子の実状の世界の上に鳳凰が立ち、下では龍が椰子の実の世界を支えているという構図である。またも図録の説明を引用してお茶をにこそう。

「金銅製龍鳳蓮菜山香炉は、総高が64cmで半島をはじめとする東アジアから出土した香炉の中では最高の美をほこっている。この香炉は4つの部分によって構成されている。蓋のつまみ部分には如意宝珠を首にはさみ、翼を大きくひろげ飛びたとうとする姿にあらわされている。その下の部分には音楽を奏でる5人の奏樂像、30余個の大小の山、人物像、堂仏像、騎馬像、騎馬狩獵像、火焰文など100余個の華やかな文様が造出されている。胴を支える脚部には1頭の竜があり、生々しくごめくかのような姿で作りあげられている。香炉は百済文化の優秀性と独創性がより一層ひきたつてみえる作品として、百済の思想と工芸技術の粋をみせてくれる。」(同書、P32〜33)

長々と引用したのは、このような考古遺物にまで国家的な意識が如実に表現されていることを感じてもらいたかったからである。この文章に続いて「優れた韓国の民族文化の水準を世界に広く宣揚する契機」がこの遺物によって作られたと述べる。この一つの精巧な金銅製香炉を以って「民族文化の水準」とまで言うかしら、と思っ

てしまつ。西洋にもいくらか優れた芸術作品がある。あえていえば日本にだってある。自分の国だけが優秀な文化を持っているんだ！と主張するのはあまりに子どもじみて恥ずかしいとは思わないのだろうか。その辺の感覚が、どうもずれているような気がしてならない。

それはさておき、この館には武寧王陵の実物大模型があり、中に入れる。これは単純だがうれしい展示である。

昼食は小さな店で豆乳の冷麺を食べる。三五〇〇W。お客は我々以外には一人で、お酒を飲んで良い機嫌になっていた。最初は店の主人が相手していたが、いなくなると、我々にというか日本人の私に話し掛けてきた。話は千葉に行ったことがあるというのと、豊臣秀吉の倭乱の話、徳川家康から始まる徳川幕府のことを知っているといった内容であつた。酔っているから何度も同じことを繰り返す。盧さんが少し相手したが、できるだけ無視。朴君が最後に「静かにするよつに」と言つたよつだ。

この豆乳冷麺は盧さんは子どもの頃よく食べて、しばらくは見るのもいやなくらい日常的に夏には食べたらしい。ところが朴君は初めて食べると言つ。盧・呉の二人は驚いていた。スープの味は豆乳そのもの。塩を加えないとあまりおいしくない。まあ私の好みではない。

そこからすぐそばの定林寺跡テリンジに行く。入場料七〇〇W。定林寺は

七世紀に建立された寺だが、今はすでに建物は残っていない。わずかに五重の石塔（高さ八・四メートル）と石仏坐像が残るだけである。私たちが訪れた時には、石仏の安置してある殿舎が修復中で、石仏は見る事ができなかった。

だが、周囲に何も無い空間に悠然と立つ石塔を眺めるだけでも、在りし日の百済を偲ぶことができる気がする。旅の疲れが出てきて、ちよつど食後でもあつたので、大きな木陰で休むことにする。木の前には、定林寺跡から出土した石造遺物が並べられている。寝転がって空を見上げる。わずかに木洩れ日がのぞく。石塔が真つ青な空に映える。ああ、このまま眠つてしまいたい。

元気を奮い起こして扶蘇山城フソサンに向かう。入場料は一六〇〇W。かつての百済王宮があつたところとされる。百済末期の三忠臣（成忠・興首公・階伯將軍）を祀る三忠祀を見て、さらに歩くと当時の軍の食料庫跡である軍倉址が現れる。扶蘇山城の碑文、竪穴式住居に至る。泗サヒル楼からは扶余の町がよく見渡せる。ここに登つてしばし歓談。扶蘇山城は広い。とにかく広い。どうしてもすべて見たいがつらい。辛いが見たい。

ようやく阜蘭寺フランに着く。もうへとへとである。こここの奥には岩から湧き出る阜蘭水がある。それを長い柄杓で掬つて飲む。生水は危険かもしれないが、こここのミネラルウォーターと称するものを飲んで大丈夫なので、思い切つて飲む。もちろん三人は平気だ。

私は少量にしておく。

そこから最後の史跡、落花岩・百花亭に向かう。とりあえず行きは下り坂で楽である。百済が唐・新羅の連合軍に滅ぼされた時、三〇〇〇人の女官が目前の白馬江に身を投げたと伝えられる場所である。女官の飛び降りる姿を散る花に喩えて落花岩と呼ぶ。見晴台のような落花亭が立っている。

韓国では、新羅・百済・高句麗の三国時代と統一新羅を一連の歴史として理解している。つまり新羅は韓民族を統一した立派な国家という位置付けである。ところが百済は滅亡している。けっして併合されたわけではない。多くの百済遺民は当時の日本に避難して、日本に帰化している。残された百済の民衆は、唐・新羅戦争に駆り出されている。百済にとって新羅は征服王朝にすぎないはずだ。三国鼎立時代と統一新羅を同質のものとするのは無理があるように思われてならない。

さて、私の体力は限界を超えていた。しかし若い三人は私の辛さがわからないようで、休もうとはしない。しっかり、しっかりと励ましてはくれるが、本当に死にそうな様子が理解できないようであった。私も、彼ら三人がまったく疲れを見せないの、自分の体力が劣ったことを嘆きながらも、もっと頑張らねばと気を奮い起こした。だが、この無理がすぐに祟ることになるとは、まだこの時点ではわからなかった。

呉さんを扶余の市外バスターミナルで下ろして、三人は清州に向かう。

清州に到着し、大学の宿舍に入ると、どっと疲れが噴出した。すぐにベッドに倒れこみたい。しかし、朴君が夕食どうしますかと尋ねてくれる。一人で食べる自信がないから、一緒に食べましょうと答える。後から考えるとこれも失敗であった。とにかく目の薬を飲むために食事しなければならないという脅迫観念に囚われていたため、無理にでも食べようとしていたのだ。夕食にはかんたんな洋食メニューもあるはずだ。それを食べようと考えるところが、朴君に今日のメニューを聞くと、ハンバーグステーキがあるが、それは売り切れたとのこと。しかたなくジャジャンライスにする。これはジャジャン麺のライス版。甘くて気持ち悪くなる。最後まで食べることができない。とにかく食事を終えて自分の部屋に戻る。ゆっくりと朴君・盧さんに挨拶をする余裕もない。

横になつていたが、気持ちの悪いのは直らない。京都にいる息子に電話をかける。息子は義母とすぐろくをして遊んでいる所だったようだ。息子の声を聞くと、涙が溢れてきて、喉の奥から熱い物がこみあげてきた。わずが一週間でホームシックのようなものに四〇歳の男が罹るものなのだろうか。息子の方は、そんなことはおかまいなく、さっさと電話を切るつとす。

しばらくしてから、トイレに駆け込む。嘔吐。大量の嘔吐である。

食中毒か。とにかく疲れきっているから、なにに罹っても不思議ではない。汗が噴き出す。少し落ち着いてからシャワーを浴びる。蒲団にはいると悪寒が襲ってくる。やばい。苦しくて我慢できない。食中毒と似た症状だ。もう、韓国料理なんか食べたくない！俺は日本食が食べたい。だいたいすべてキムチの味付けだなんてワンパターンじゃないか。韓国人は味覚がないのか！次々と悪態が頭の中を過ぎる。ああ、もう明日日本に帰りたい。せめてソウルで生活したい。外国人教師がいるのに、この大学には喫茶店の一つもなく、朝、コーヒートーストを食べることすらできないのは、外国人を排除している証拠だ。全身を貫く痛みに堪えながら、そんなことを考えているうちに、いつの間にか眠りに陥ったようである。

さて、私の韓国研修はまだまだ続く。この後、温陽温泉、独立記念館、温陽民俗資料館、釜山、慶州、東萊温泉、梵魚寺、通度寺、釜谷温泉、海印寺、利川、慶州、仏国寺、全州、智異山、俗離山などにでかける。しかしそれらをここに記すには紙数が足りない。また機会を見つけて続編を掲載したいと考えている。よかったらまた読んでいただきたい。

しかしわずか一週間分での分量、二ヶ月分をすべて書き記すのにどれだけかかるのだろうか。自分でも空恐ろしい。